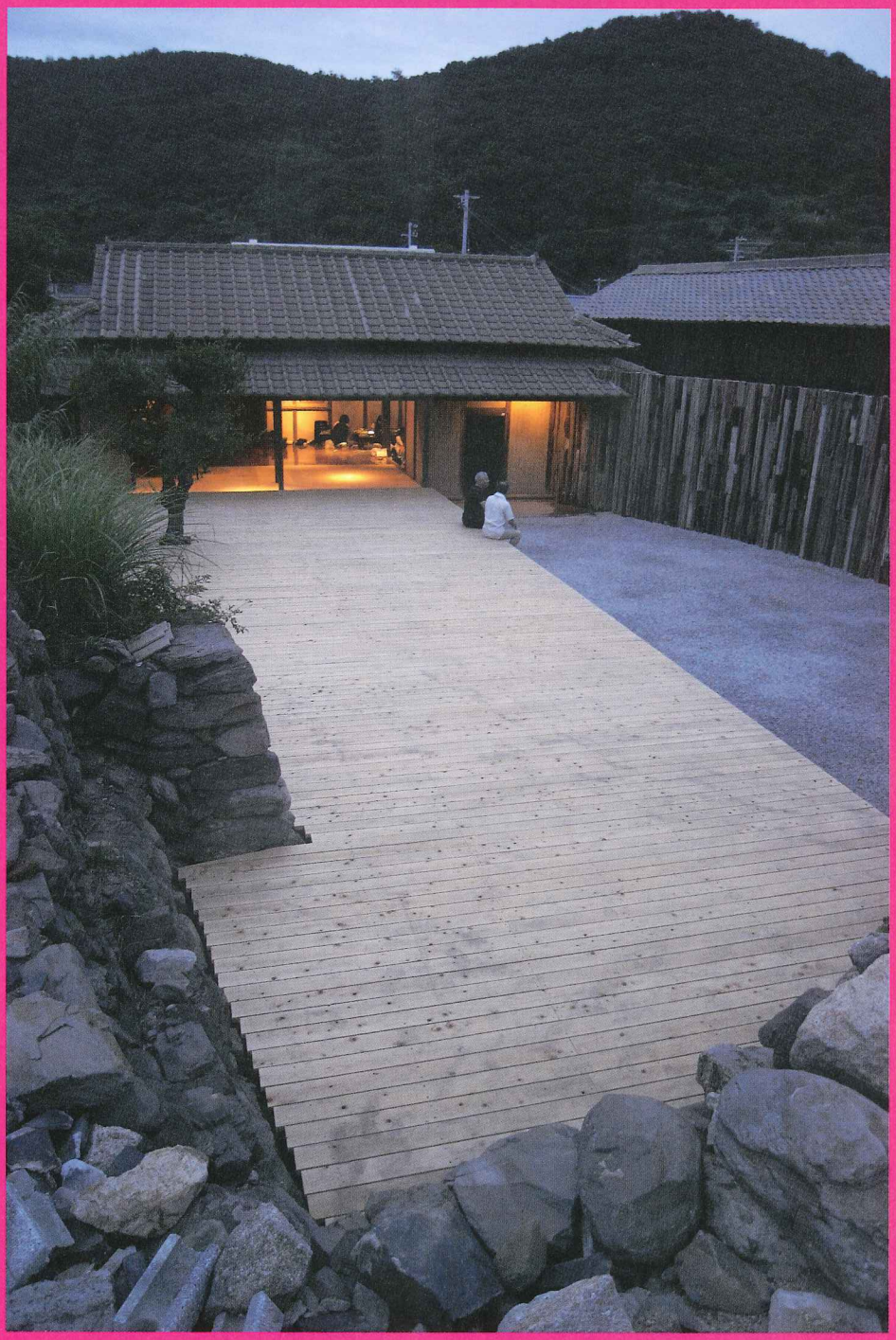
愛知県立芸術大学 学報

発行日　平成23年2月1日
編　集　愛知県立芸術大学広報委員会
発　行　愛知県立芸術大学事務局芸術情報課
愛知県愛知郡長久手町大字岩作字三ヶ峯1-114
TEL 0561-62-1180 FAX 0561-62-0083
Home Page http://www.aichi-fam-u.ac.jp/

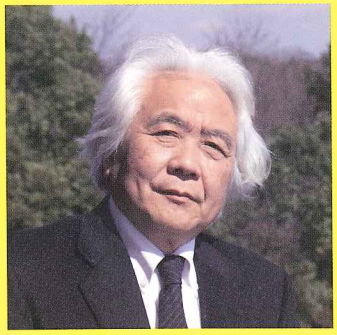
Aichi Geidai News



2010年7月19日から10月31日まで、瀬戸内海の7つの島と高松市を会場に「瀬戸内国際芸術祭2010」が開催されました。本学ではアートプロジェクトを組織して参加し、女木島の古民家を再生した「MEGI HOUSE」を拠点に活動を展開しました。
詳細は6ページの記事をご覧ください。

No. 58

MESSAGE 学長あいさつ



愛知県立芸術大学学長
磯見 輝夫　いそみ・てるお

2010年の夏はあわただしく過ぎて行きました。南京芸術学院とのウィンドオーケストラ合同演奏会、上海万博での演奏。あいちトリエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭と盛り沢山の夏でした。そして、その中で学生たちの力に改めて感銘をうけました。南京や上海での学生たちの猛暑の中での活躍、高いレベルの演奏と愛知県立芸術大学の存在感を、学生を通して実感しました。

瀬戸内国際芸術祭のメギハウスはとても魅力的でした。時の流れが暖かく感じられる場所でした。そして、島の人たちとの交流が、大学という狭い範囲を越えて、社会との実のあるつながりとなり、学生にとても大きな教育的効果をあげたのではないかと感じました。

これからもこの施設を使って、様々なことが繰り広げられることを期待します。それは地元愛知での地域とのつながりにも大きな示唆を与えると思います。

今年は7年に1回受けることを義務づけられている大学の認証評価を受けなければなりませんでした。当初は大学の審査ということで、プレッシャーを感じましたが、評価を受ける学位授与機構の説明や、担当を引き受けてくれた美術学部の設楽先生、音楽学部の北住先生、そして、学務課の大橋さんとの話し合いの中で、結局は飾らずあるがままの大学の姿を見てもらうことが、認証評価の趣旨に添うことであると結論づけました。

大学が正常に機能し、学生たちがそこで教育を受け、研究に励んでいることが伝えられれば、それ以上のことをする必要はないと考えました。作業にあたっては細川芸術教育学生支援センター長、教務委員長、入試委員長等、多くの人に協力していただき、無事に報告書を作ることができました。

まだ最終的な結論は出ていませんが、10月の訪問調査の際に、非公式の意見でしたが、生き生きとした学生達の態度に大変好感を持ったことを各委員一致して話されておりました。その上で施設については、強くその改善を要請されました。おそらく評価にはそのことが盛られることと思います。

平成22年4月1日に赴任された先生方をご紹介します。

船曳 鴻紅 ふなびき・こうこ
デザイン専攻客員教授

愛知県立芸術大学にお招きいただき、デザインを経営的視点から見ることをお教えすることになりました。しかし芸大にうかがって女子学生の数が多いことに、女性と仕事という観点からも何らかの役割が期待されているのではないかと思い始めています。

私は4人の子供を育てた専業主婦が長く、仕事を始めたのは40代からです。しかも最初の内は仕事半分、家庭のこと半分といった調子で、いわゆるキャリアウーマンとは全く違います。それでも63歳になる今、出遅れてきたことを悔やむ気持はありません。逆に本格的に仕事に関わってまだ20年であることが、どんなことも新鮮に受け取れる、いつも好奇心全開でいられることにつながっています。この何に対しても好奇心を持つことが、デザインには大変重要な要件であり、それがこれまでの私の仕事を支えていると言っても良いほどです。

私が経営する東京デザインセンターは、インテリア・マートとしての情報発信機能や情報交流機能を持っています。全スタッフは女性で、そこでは自主企画だけでなく、外部参加者に施設やネットワークといった「場」を利用していただくことで活動が展開しています。女性ならではのコミュニケーション力はもちろんのこと、組織や既成概念にとらわれないで活動域を広げていることが、実はこれらの幅広いネットワーク作りに大きく役立っているのだと思います。

白石 和己 しらいし・かずみ
陶磁専攻客員教授

愛知県立芸術大学には、これまで何度か陶磁専攻の非常勤講師として来たことがあります。

もっとも年1日だけの講義を数年続けたのみでしたので、大学全体を知るほどではありませんでしたが、そのときの印象は、ずいぶん深い森の中に近代的建築が忽然と現れるといった感じで、学生の姿もあまり多くなく、ゆったりとした静かなキャンパスの雰囲気でした。受講していた学生はみんなまじめだったという印象があります。また陶磁専攻の方針、実技での文様制作については写生をしっかりと身に付けたうえで独自の表現を作り出してゆくこと、土や釉薬などの材料も基本から身につけるといった教え方は、たいへん重要なことだと感じていました。

私はこれまで主に美術館で仕事をしてきており、大学教員としての経験がありません。いくつかの大学の非常勤講師として講義を持ったことはありますが、ほとんどが集中講義の形式だったので、学生と長時間接することはあまりありませんでした。今度も非常勤ですので、あまり時間を取ることはできないかもしれませんが、近代、現代の工芸史を専門としてきましたので、学生諸氏と、いろいろ一緒に考える時間を持てればと思っています。

生まれ故郷の愛知県には、これまで仕事上あまり深い関わりがありませんでしたが、このたび客員教授としてお世話になることになりました。何らかの形で役に立てればと思っています。

松野 修 まつの・おさむ
教養教育等教授

1655年初夏、ドイツの街マグデブルグでオットー・フォン・ゲーリケ(Otto von Guericke)は直径が30センチ以上ある2つの銅の半球をつなぎあわせた。彼は自作の空気ポンプを使って2つの半球から空気を抜き、両側に8頭、つごう16頭の馬を繋いだ。御者の声とともに馬は懸命に引いたにもかかわらず半球は容易に分かれず、観衆が「16頭の馬をもってしても無理なのか」と思ったそのとき、半球は鋭い音ともに2つに分かれた。大規模なこの公開実験はカスパル・ショット(Kasper Schott)によって「マグデブルグの新実験」と名付けられ、ヨーロッパに広く伝えられた。この実験が今日でも「マグデブルグ」の名を冠して呼ばれるのは、実験の主宰者ゲーリケが当市の市長を勤めていたからだった。彼が行った一連の真空実験は、街の人たちを大いに楽しませただけでなく、当時としては最高の水準にある歴とした科学実験でもあった。近代科学が成立しつつあったこの時代、科学は〈知的な楽しみごと〉として研究されていたのだ。〈芸術〉にも、この時代に大きな変化があった。

2009年。わたしたちはゲーリケの空気ポンプを復元し、鹿児島大学の学生たちの協力を得て各地でゲーリケの行った公開実験を再現してみせた。〈知的な楽しみごと〉としての科学を復活させるためにである。ただし16頭の馬を使った実験については、その再現に未だ至っていない。

TOPICS トピックス

南京芸術学院と上海万博日本館で本学初の海外公演を実施

平成22年は、愛知県と江蘇省の友好提携30周年、愛知県立芸術大学と南京芸術学院の交流提携25周年にあたります。その記念事業として、愛知県から委託を受けて、7月に本学の学生、教職員が南京を訪問し、音楽学部管打楽器コースの教員、学生ら39名と南京芸術学院の学生ら42名による合同演奏会を開催しました。

7月29日、南京芸術学院のコンサートホールにおいて、記念事業に出席するため南京を訪問中の神田知事や愛知県議会の奥村副議長、本学の磯見学長らと江蘇省政府の柏蘇寧副主任や南京芸術学院の鄒建平院長をはじめとする関係者の出席のもと、多数の南京市民や日系企業の関係者らを招いて実施しました。

本学の武内安幸教授と南京芸術学院の居蘊氏の指揮により、第一部では、国際交流にちなむ「海を越える握手」などの曲を各校が演奏。第二部では、京都をイメージした「鳳凰が舞う」、南京芸術学院の王建元音楽学院長の作曲による初演作品「啓蟄」などを合同で演奏して、多数の聴衆を魅了しました。

南京の公演の後、万博が開催されている上海へ移動し、8月1日に上海万博日本館愛知県ウィークのプログラムの一つとして、同館イベントステージにおいて日本の名曲や日本民謡のメドレーなどを多数の万博来場者に披露し、好評を博しました。

今回の演奏会は、本学初の海外公演として実施したものです。参加した学生にとって、海外の学生との合同演奏は貴重な経験となり多くのことを学んだことと思います。また、多数の関係者の尽力により提携校と協力して合同事業を実現できたことは、今後、国際交流事業を進展させる上でも得がたい経験となりました。

COP10 ミニ展示 法隆寺金堂壁画模写展示館

平成22年10月、名古屋市でCOP10が開催され、本学にほど近い愛・地球博記念公園でも関連イベントが行われました。それに併せて法隆寺金堂壁画模写展示館では、10月16日から31日までの秋季展第2期に、生物多様性と日本画材料をテーマとしたミニ展示を行いました。

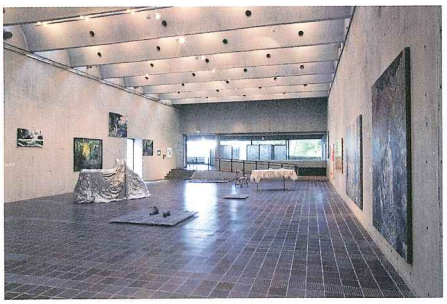
日本画材には生物を主原料としたものも比較的多く、例えば接着剤となる膠(にかわ)やコチニールカイガラムシから抽出した赤色絵具、牡蠣の殻を粉砕した胡粉などがあります。意外性もあることから、訪れた来館者は興味深く展示に見入っていました。なお、本会期中は、373名が来館しました。

本学では、昭和49年から法隆寺金堂壁画模写制作を始め、以後継続して、日本画材・技法による模写委託事業を推進しています。近年は平安時代から鎌倉時代の仏画を中心に模写制作を行っていますが、1000年以上の歴史を持つ日本画は、時代ごとの様式はともかく、技法材料に大きな変化がありません。したがって同素材同技法をもって、原本忠実に写し取ることを原則としています。

ところで、模写には大きく二つの意義があります。一つは伝統的な古典技法の継承、もう一つは文化財の保護です。古来芸術家は、優れた古画や古像を模倣することで、技術を修得し、創造性を培ってきました。一方、貴重な作品の保存と公開は相反するため、優秀な模写や模像が、その大きな手助けとなります。

平成22年度は、現在模写委託事業で制作している作品が完成する年にあたります。今後、さらに事業を継続することで、本学の模写作品はより充実し、大きな財産になることでしょう。

H22年度アウトリーチ「アイチ・ジーン」AICHI GENE -some floating affairs- 開催報告



芸術資料館では、平成19年度より隔年でアウトリーチ活動を行っており、今年度で第3回目を迎えます。第1回目は、愛知県陶磁資料館で本学の陶磁資料を公開、第2回目は、愛知県美術館で高松塚古墳壁画模写を中心とした本学の模写作品を紹介してきました。

第3回目となる「アイチ・ジーン」展は、地域連携を強く念頭に置き、名古屋市を中心に、愛知県の東に位置する芸術資料館、西に位置する清須市はるひ美術館、東南に位置する豊田市美術館という、県内とはいえ交流の少ない3つの場所で内容を変え、「愛知」という場所を進行形として捉える試みの展覧会です。今年度、会場の一つとなる豊田市美術館と本学は連携協定を結びました。そして、本学卒業生の作品を数多く収蔵し、はるひ絵画トリエンナーレなど新進作家の発掘や顕彰活動を積極的に行っている、清須市はるひ美術館からは作品をお借りし、本学の収蔵品および関係者による新作を交えて紹介します。

すでに会期終了を迎えた芸術資料館会場では、清須市はるひ美術館の収蔵品を核に本学関係者の新作を紹介しました。「アイチ・ジーン」というタイトルの一つに「遺伝子[gene]」という意味を込めています。清須市はるひ美術館収蔵作品は、本学だけでなく、他大学および他府県出身の作家を含みます。環境に左右され変化する遺伝子のように「愛知人」もしくは「愛知県立芸術大学」の遺伝子があると仮定し、それらの遺伝子、および周辺に何らかの反響を期待しました。

また本会場は、あいちトリエンナーレの並行企画として開催された事もあったためか、入館者の約8割が学外の来館者で占め、通常の芸術資料館の展覧会と逆転する結果となりました。

「アイチ・ジーン」展は、2011年2月から3月にかけ、出品作家および展示内容を変えながら清須市はるひ美術館、豊田市美術館へと巡回します。本展を通し、「愛知」という場所を交錯点として、または「愛知人」としての出会いが、新たなつながりを生み、広がるきっかけとなることを願っています。

サテライトギャラリーオープニング展 「愛・知・芸術のもりから―美術学部教員による作品展」

平成22年5月、栄町商店街の協力を得て、名古屋栄に愛知県立芸術大学サテライトギャラリーがオープンしました。その最初を飾るオープニング展として「愛・知・芸術のもりから―美術学部教員による作品展(第一弾)」を5月19日から30日まで開催しました。

同時期、近隣のSMBCパーク栄ギャラリーで栄町商店街振興組合主催の地元著名人・文化人らによる美術展が行われたこともあり、初日前日、相互協力しながら、両会場それぞれで内覧会を開きました。ともに愛知県知事をはじめ、多くの関係者が訪れ、華やかな幕開けを迎えることができました。

出展者は磯見輝夫学長、日本画専攻松村公嗣教授、油画専攻山本富章教授、彫刻専攻森北伸准教授の四名。小さなスペースではありましたが、本学ギャラリーのスタートにふさわしい、充実した空間となりました。なお、会期中は371名の方々が来館しました。

その後も継続して、サテライトギャラリーでは本学の教員、学生を主体とした展覧会や講座、ワークショップなどが行われています。今後も新しい情報発信の場として、積極的に活用していく予定です。

デザイン専攻夏季講習会

猛暑のさなか、去る8月27日(金)に、デザイン専攻と広報委員会の企画による「デッサン講習会」を本学デザイン棟にて開催し、高校生および社会人による総計14名の受講生が参加しました。

この講習会は受験者増加方策活動の一環として企画されたものであり、実技指導の実体験を通じて、芸術大学の魅力と自身の可能性を発見してもらうことを目的として開催されました。

専攻として前例のない試みであり、実施までには多くの試行錯誤を余儀なくされました。告知の方法、受講確認や集金の段取り、アトリエの暑さ対策、等々....。結果的に14名という参加者数は当初予定されていた定員を大きく下回ってしまいましたが、少数であったが故に個別指導の密度は高く、講習会終了後のアンケートでは非常に満足度の高い内容であった旨が確認されました。

講習の内容には自信を持って臨んでおり、受講生の反応も期待された成果を証明するものでしたが、それらをより多くの人々にまで届けることができなかったもどかしさを感じています。同様に、大学におけるサテライト講座や展覧会・演奏会活動においても「充実した活動を行っているのにもかかわらず、その情報が巷間に喧伝されていない」という歯がゆさがあるのではないでしょうか。広報戦略・活動の重要性というものを実感した一日ともなりました。

ともあれ、たとえ少子化時代においても、芸術に関心を持つ人々がいる限り芸術大学の存在意義が減ずることはありません。今後も愛知芸大の存在と価値を広く知らしめるためにどのようなことができるのか、頭と体を使って模索していきたいと思います。

芸術創造センター活動報告

本事業も4年目となり、やるべき仕事が見通せるようになってきたように思います。しかし、それぞれ事業の内容がとても専門的で多彩ですので、そのつど仕事の拡がりに対応する必要があります。また学内の学生・教職員向けのものだけではなく地域貢献も視野に入れた学外での発表等に力を入れますと、関連する仕事量は多くなります。やり終わって、非常に大きい影響力の存在を感じるたびに、担当して下さった先生方と職員の方々への感謝の気持ちで一杯になります。

2010年 アーティスト・イン・レジデンス事業は、4事業を行いました。5月ピアニストのヴィタリー・マルグリス教授による「究極のロマンティシズム」、6月ランドスケープのジョン・マレー教授による「横断するランドスケープ」、(COP10に参画したシンポジュームも奏楽堂で行いました)10月クラウス・カンギーサー教授による「ケルンの風II」、12月アーサー・ワトソン教授による「Double Diablerie」、どれも大変充実した中身の濃い事業となりました。

「ケルンの風II」は2010年 ショパンとシューマンの生誕200年を記念して企画しました。ショパンのチェロソナタのヘンレ版の校訂者であるカンギーサー教授の、その曲のレッスン、アーティスト・トーク、そして我々との大学間交流演奏会での演奏は素晴らしいものでした。また大学主催の定期演奏会におけるシューマンのチェロ協奏曲は、演奏者と聴衆が一体となり、双方に大きな感動の波が押し寄せた忘れられない演奏となりました。

4日間に渡る公開レッスンは、毎回9:30〜12:30まで、休憩も無く熱のこもった本当に充実したレッスンで、午後にはオーケストラとの練習、我々教員との室内楽のリハーサルと、そのエネルギッシュでしかも周到な準備がされた上での音楽活動にはFD以上、音楽人として尊敬の念さえ持ちました。その上、興味深い内容の博学の話もたくさん伺うことが出来、学生も教員も大いに眼を開かれました。大きな意義深いコンサートを二晩、どちらも大好評な演奏会として下さり、ショパンとシューマンそして偉大な作曲家達を愛することを深めて下さったカンギーサー教授に心から感謝しています。

アーティスト・イン・レジデンス事業の成果を示す一例として細かく報告させていただきました。

愛知芸大・瀬戸内アートプロジェクト

アートプロジェクトを主導した彫刻専攻土屋公雄教授

社会の価値観がこれほど多様化した時代では、表現世界も芸術・文化の領域にとどまらず、地球環境問題を含め、人間社会のあらゆる側面と関連しているよう思えます。従って美術の世界も、アーティストが自己の表現だけに固執するのではなく、美術の文脈を超えた幅広い視点で、社会における新たな価値・役割を創造することが必要です。

昨今、国内外を問わず地域再生事業の一環とし、現代アートの創造性や地域文化の力を媒体とする動きが活発化しています。この事実は、'90年代以降の芸術表現が、美術館や劇場・文化施設といった閉じられた領域から、社会の中へと表現の場を求めていった動向と結びつきます。2000年よりスタートした「大地の芸術祭・越後妻有トリエンナーレ」も、過疎が進む新潟の日本の原風景とも言える棚田や里山を舞台に、アートがプロジェクトとして地域に関わることで、その土地固有の歴史・文化を再発見し、地域再生への可能性を示唆するものとして、その新たな役割を担い始めています。アートには本来その土地の持つ潜在能力をかぎ分ける特殊な能力があり、芸術や文化を媒体とした地域活性化プログラムは、衰退の一途を辿る地方にとってコミュニティを再生し、失いかけている個性を再認識し、地域に元気と誇りを取り戻す手助けとなっているのです。

今回愛知県立芸術大学が、美術・音楽の両学部をあげ大学プロジェクトとして参加した「瀬戸内国際芸術祭2010」も、過疎化や高齢化に悩む瀬戸内海の島々を舞台に開催された国際展です。展覧会は「海の復権」をテーマに、18カ国から75組のエスタブリッシュされたアーティスト達が7つの島にわかれ、地元住民の協力を得ながら作品を制作し、アートを通して島々に活力を生み出すことを目的としたイベントです。愛知芸大としては、彫刻専攻を中心に2009年4月より瀬戸内の調査を開始、9月には美術・音楽両学部の教員並びに博士課程学生も含む11名でプロジェクトチームを結成、10月より実施基本計画等の本格的活動がスタートしました。

愛知芸大に与えられたサイト（場）である女木島は、高松港からフェリーで約20分。女木島は桃太郎伝説の鬼が島でも知られ、「オオテ」と呼ばれる防風・防潮用の石垣が印象的景観を形成している島です。ただ、この島も御多分に漏れず人口減少と高齢化の問題を抱え、島民わずか200名足らずとなっています。そこで我々愛知芸大プロジェクトチームは、この島に点在する空き家を改装し、美術と音楽がコラボレーションする新たな表現活動のできる環境「MEGI HOUSE」を創出し、サイトには音楽や様々な研究活動の場としてコンサート空間やギャラリーを整備し、島で暮らす人々と繋がり、地域の歴史・文化を享受しながら、本学独自の創造的プログラムを目指し、活動拠点となるサイト建設工事を着手しました。

現場での作業は2010年4月より開始され、美術学部の教員・学生を中心に地元業者の協力も得て、空き家の納屋・小屋の解体にはじまり母屋改修工事、さらに母屋の床は銅版を張り、中庭には廃材による音響壁を湾曲に立ち上げ、石垣に沿って板張りのステージを設置。7月の展覧会オープンまでの約3ヶ月間で、作業に携わった人口は延べ200名。教員も学生も現場近くの民宿に寝泊りし、買出しや賄いも交代制の合宿生活を行いながらプロジェクトは進行しました。オープニングの「家開き」では、改装された母屋の縁側から庭に広がるステージに、島民ら約100人が集まり、伝統芸能である鬼太鼓を島の青年団が披露してくれました。今回、瀬戸内国際芸術祭は約100日の期間で開催され、愛知芸大も期間中、音楽学部の教員を中心にピアノ・コンサートやエレクトロニクス・コンサート、クラシック演奏や打楽器で島内を巡るパフォーマンス「matsuRHYTHM」など、盛りだくさんのイベントが企画され、展覧会最終日には地元吹奏楽連盟の協力を得て「海のファンファーレ」を実施、吹奏楽の華やかな響きが瀬戸内の島々へ奏でられました。

本大学には美術と音楽の二つの芸術分野があり、今回のプロジェクトでは、この両分野のコラボレーションによる表現が、独自なアートプロジェクトとして役割を発揮し展開されたのです。現代が精神的安定性を欠いた時代に、芸術が果たせる社会的役目を考える上では、芸術大学の組織としての取り組みは、将来益々地域や社会、人々の精神的文化の活性化に意義深いものと成っていくでしょう。その事からも、瀬戸内アートプロジェクトが今後も学外活動の場として継続されることを願っております。末筆ながら、この度のプロジェクト実施にあたり多大のご支援・ご協力をいただいた関係者の皆様には、心より感謝いたします。

教員ピックアップ INTERVIEW

山本 裕之　やまもと・ひろゆき
作曲専攻准教授

山本先生の研究室を訪問して先生の研究・教育活動や作家としてのスタンスなどについてお話を伺いました。

どのような作品を書かれているのでしょうか？また、作曲以外の研究活動もございますか？

作曲家としての活動では、主にアコースティックな器楽・声楽作品の作曲です。その中で特にどのような楽器や編成かというのは自分ではあまり決めていません。出来るだけ依頼された編成や条件に合わせることにしています。これまで特に多かったのは、ピアノ、トランペット、低音金管楽器、声楽アンサンブル、小編成アンサンブルです。珍しい編成ではカヤグムとオルガンの組み合わせで書いたことがありますが、これはもうオーダーメイドの極致とでもいいましょうか。作曲家の役割で重要なことの一つは、過去にない楽器や組み合わせの依頼を受けて、未来にその可能性を繋いでいく、ということがいえるかも知れません。作曲以外の研究活動では、ここ数年ユーフォニアムの特殊奏法について演奏家と共同研究をしています。これも将来に向けてその楽器のレパートリーが生み出されるための下地づくりとして、大切な仕事だと思っています。

音ヲ遊ブ
http://japanesecomposers.info/ja/

本学での教育活動についてもお話しいただけますか？

作曲のレッスンの他に、和声などの理論系授業では、理論がどのように実践に関わっていくのかということを中心に話すよう心がけています。特に実技系大学では理論と実践が乖離してしまうと意味がありません。
その他に、今は直接は関わっていないのですが、去年はジョン・ゾーンの作った「コブラ」というゲームピースで学生達と一緒に即興のワークショップを行っていました。これは教育もさることながら、即興初心者である私自身の勉強のためという側面もありました。

先生の出版物等をいくつかご紹介いただけますか？

出版物はあまり多くないのですが、これまでポートレートCDが1枚、楽譜の出版が3冊だけあります。CD（fontec FOCD2555）は7年前のものですから、今の私の作品と少し傾向が違いますが。

その他いろいろユニークな活動をされているようですが？

はい。現代音楽のようなニッチな世界は、インターネットでの情報発信がより重要だと思っていて、日本の作曲家を紹介する「音ヲ遊ブ」というサイトを1996年より続けています。あまり頻繁に更新してはいませんが、作曲家アーカイヴとしての役割も少しはあるかなと思っています。それからコンサートの企画等もします。これは作曲同様にコンサートも自分の「作品」と位置づけることがあります。

どうもありがとうございました。益々のご活躍を期待しております。

（聴き手　久留智之広報委員）

news 学生・卒業生のコンクール等受賞者／入選者紹介

音楽

作曲	平岡　聖	学部3年	第9回 TIAA全日本作曲家コンクール 日本歌曲部門 入選
	井上陽葉	学部2年	パーカッション・ミュージアム作品募集2011 入選
音楽学	伊藤　円	学部4年	第11回 日本アンサンブルコンクール アンサンブル特別賞(最高位)
声楽	船越亜弥	院前期1年	広島プロミシングコンサート2010 出演
	中嶋真利子	院39期卒	第13回 長江杯国際コンクール 審査員特別賞　声楽部門一般の部A 第1位
	岩川亮子	院37期卒	第6回 長久手国際オペラ声楽コンクール 第3位
	水野秀樹	院前期1年	第6回 長久手国際オペラ声楽コンクール 特別賞
	藤原彩雅	院前期2年	第64回 全日本学生音楽コンクール 名古屋大会 声楽部門 大学・一般の部 第2位(全国大会進出)
	安田裕美	学部4年	第64回 全日本学生音楽コンクール 名古屋大会 声楽部門 大学・一般の部 第3位
	山崎英明	学部4年	第1回 ノーヴィーヴェーチェル国際音楽コンクール 入選
ピアノ	大瀧拓哉	院前期1年	第3回 野島稔・よこすかピアノコンクール 第3位
	金澤みなつ	院前期2年	第11回 大阪国際音楽コンクール ピアノ部門 Age－G 第1位、ジェルメール・ムニエ賞、ショパン賞、その他
弦楽器	波馬朝光	学部2年	第4回 全日本芸術コンクール関東本選 第2位(1位なし)
	田中千尋	学部3年	第11回 日本アンサンブルコンクール アンサンブル特別賞(最高位)
管打楽器	北村亜以里	学部4年	第8回 イタリア国際打楽器コンクール・マリンバ部門 カテゴリーB 1st Prize Absolute(第1位より名誉がある最高位賞)

美術

日本画	柳沢優子	学部39期卒	第21回 臥龍桜日本画大賞展 優秀賞
	杉　佳子	院前期1年	パルケ 学長賞、第1回 美術科専攻選抜展 専攻優秀大賞、再興95回 院展 入選
	森下麻子	院前期1年	第５回 日本画公募展 前田青邨記念大賞展 奨励賞、第65回 春の院展 入選、第8回 雪舟の里 総社 墨彩画公募展2010 入選
	出口友佳子	院前期1年	第５回 翔け！二十歳の記憶展 準グランプリ
	徐　凡軒	研究生	2010南瀛奬雙年展 南瀛賞
	加藤清香	院前期2年	再興95回 院展 入選
	永田恭子	院前期2年	第5回 日本画公募展 前田青邨記念大賞展 入選、第12回 雪梁舎フィレンツェ賞展 入選
	初瀬博輝	院前期2年	第5回 日本画公募展 前田青邨記念大賞展 入選、第65回 春の院展 入選
	深尾育美	院前期2年	第5回 日本画公募展 前田青邨記念大賞展 入選、第14回 新生展 入選、再興95回 院展 入選
	山岡佳澄	院前期2年	第5回 日本画公募展 前田青邨記念大賞展 入選、第65回 春の院展 入選、第28回 上野の森美術館大賞展 入選
	山田雅哉	院後期2年	第65回 春の院展 入選
	前畑裕司	院後期1年	第65回 春の院展 入選
油画	江上真織	院前期2年	第5回 翔け！二十歳の記憶展 グランプリ
	古畑智気	院前期2年	第25回 ホルベイン・スカラシップ 受賞
	東条香澄	院前期2年	第34回 全国大学版画展 第34回 町田市立国際版画美術館収蔵賞
	酒井阿弥子	院前期2年	第34回 全国大学版画展 第34回 町田市立国際版画美術館収蔵賞
	岩瀬晴香	院前期1年	トーキョーワンダーウォール2010 トーキョーワンダーウォール賞
	木曽浩太	院前期1年	第35回 全国大学版画展買い上げ収蔵賞
	源馬菜穂	研修生	トーキョーワンダーウォール2009 トーキョーワンダーウォール賞
彫刻	大澤実織	学部3年	第5回 飾り瓦コンクール 読売新聞社賞
	谷口智宏	院前期1年	第5回 翔け！二十歳の記憶展 中日新聞社賞
	若松荘平	学部2年	第2回 彫刻コンクール 入選
デザイン	望月未来	院前期2年	2009 シャチハタ ニュープロダクト・デザイン・コンペティション 後藤賞
	西居洋毅	院23期卒	2009 シャチハタ ニュープロダクト・デザイン・コンペティション 深澤賞
	山田彩香	学部2年	GATSBY学生CM大賞2010 マンダム賞、みんなの賞
	坂井秀行	学部4年	「守ろう大切な音楽を♪」キャンペーン2010 キャラクター部門 グランプリ
	坂口真耶	院前期1年	雑誌「イラストレーション」誌上コンペ「ザ・チョイス」2点入選
	大西達朗	院前期2年	美ナビ展 クリエイティブ部門 ノミネート出展、第5回 タグボートアワード ノミネート出展、 YOUNG ARTISTS JAPAN Vol.3 審査委員特別賞
陶磁	久野笑加	院前期1年	第41回 東海伝統工芸展 入選
	熊澤文太	院前期1年	第41回 東海伝統工芸展 入選
	桑下未奈子	院前期2年	第41回 東海伝統工芸展 入選
	前田江里奈	院前期2年	第41回 東海伝統工芸展 入選、第57回 日本伝統工芸展 入選
	村上朋見	院前期2年	第41回 東海伝統工芸展 入選
	兪　期天	院前期2年	第41回 東海伝統工芸展 入選